慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本橋村松町・ 久松町商業史覚書
Sub Title	Historical Study of Commerce of Nihonbashi, Case of Muramatsu-cho and Hisamatsu-cho
Author	白石, 孝(Shiraishi, Takashi)
Publisher	
Publication year	2000
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.43, No.2 (2000. 6) ,p.1-
JaLC DOI	
Abstract	本稿は日本橋の村松町(現東日本橋1丁目)と久松町の商業史的研究の覚書である。すでにこれまでも筆者は著書や本誌所載論文で,様々な町を同様の現点で記してきたが,ここでは,この2つの町が,江戸時代に起立したといわれるものの,必ずしも,その時期,起立の仕方が明らかでないという疑問を提起し,同じように明治になって,近くの武家屋敷を町に組みこんでゆきながら,大きく町の様相を異にしていったゆえんを探る。これまであまり指摘されなかった武家屋敷に住む幕臣の違いという歴史にも注目し,更に明治における街並みをみて,村松町が「内
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-20000600-00686260

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田商学研究
第43巻第2号
2000年 6 月

2000年4月17日掲載承認

日本橋村松町・久松町商業史覚書

白 石 孝

<要 約>

本稿は日本橋の村松町（現東日本橋1丁目）と久松町の商業史的研究の覚書である。すでにこれまでも筆者は著書や本誌所載論文で，様々な町を同様の現点で記してきたが，ここでは，この2つの町が，江戸時代に起立したといわれるものの，必ずしも，その時期，起立の仕方が明らかでないという疑問を提起し，同じように明治になって，近くの武家屋敷を町に組みこんでゆきながら，大きく町の様相を異にしていったゆえんを探る。これまであまり指摘されなかった武家屋敷に住む幕臣の違いという歴史にも注目し，更に明治における街並みをみて，村松町が「内向きの町」になり，久松町が堀留界隈の織物問屋街化の一環となり，全体として「外開きの町」となったこと，またこれらの違いが更に土地所有者にも現れていることを記したものである。

<キーワード>

村松町，久松町，町の起立，町名他所先在説，江戸名鑑集成，分地，拝領町屋敷，諸向地面取調書，古手問屋江口屋，旗本・御家人屋敷，織物問屋街化，洋織物商，町の個性，芝居茶屋，喜昇座，久松座，明治座，外に開いた町，内向きの町，沽券図，地主名鑑，町外者地主比率，明治45年地籍台帳，町外者地主リスト

1．はしがき

日本橋には様々な史的特徴をもつ町が多い。前稿では，古くから江戸の経済発展を担い，各種の商業が町内に自律的に集積し，繁栄をたどった町々と違って，武家屋敷跡から起立した橘町を取りあげたが[1]，本稿では，この橘町より更に南の浜町（俗称）にかけての町の中で，明治までずっと武家屋敷地であった2つの町，村松町と久松町とを俎上に載せてみたいと思う。

しかし，これらの町については，あまり詳しい町誌のようなものはない。浜町については，窪田吾郎氏がすでに，『浜町史』（上・下）にまとめ，震災後の区画整理については，第十二地区土地区

1） 拙稿「日本橋橘町商業史覚書」三田商学研究41の6

画整理完成記念会の『濱町誌』や，村松町との区画紛争を記した脇田久勝『濱町史』（浜町１丁目町会蔵版）があるが，残念ながら，村松町・久松町を史的に究明し，その商業史的比較研究ともなると，皆無といってよい。本稿は筆者がこれまで本誌にたびたび記してきた「日本橋の街の商業史」の一環として，これを取りあげるものである。

まず，最初に，この２つの町の起立について検討する。実は起立の時期，その経緯など様々であって明らかではない。そこでは私なりの疑問を記しておいた。明治になって，それまでの武家屋敷地が村松町・久松町に加えられるが，これも，どのような幕臣がここに屋敷をもっていたか，時代毎の江戸図では姓名が記されているものの，それらが具体的に記されたものはない。これを元禄・文久という江戸時代の中期と幕末について記したのが表１である。ただ職身分のわからなかった者もあり，十分な立論はできなかったが，ここにもまた村松町と久松町との史的特徴をみることができるであろう。そして，これまで，旗本・御家人の屋敷としか記されなかったこの界隈が，少しでも具体性をもつものになれば，その一歩となるかも知れない。

この２つの町が，明治になって変ってゆくのを，明治11年と大正２年についての坪数，人口，戸数からみたのが表２である。そして，明治期に急速に町屋となった２つの町の街並みは図２の略図でみることができる。これを作図することにより，更に村松町と久松町の町の様相の違いが明らかになろう。しかし，より重要なのは，久松町が，浜町川入堀に面しているだけに，堀留界隈の織物問屋街化の影響を強く受け，同様の傾向を示した点である。表３は明治31年の村松町・久松町の織物問屋である。

しかし，久松町については，明治座の存在が大きい。周辺に芝居茶屋のある町の姿は，なによりも，商業史的にこの町の個性を形づくったものといわなくてはなるまい。

更に本稿では，これらの町の町外地主について，その特徴を抽出する。表４がこれである。ここにもまた村松町と久松町とは異なった姿をみせるのであった。

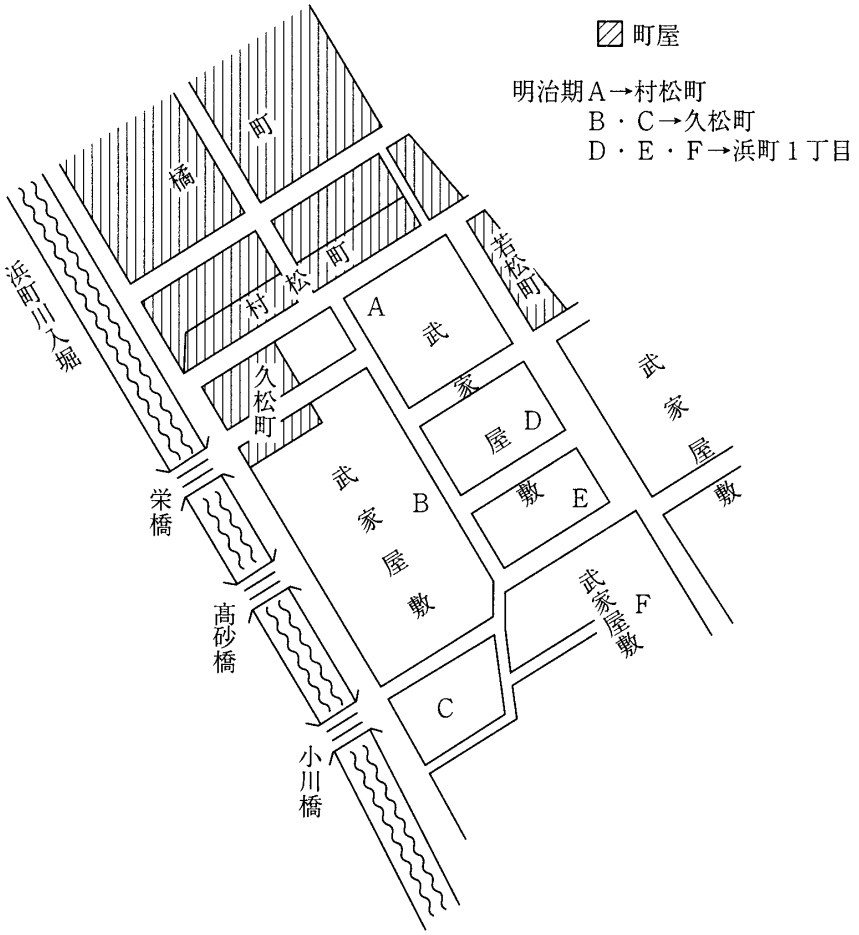
２．町の起立と特徴比較

図１は江戸時代における村松町・久松町の界隈の略図である。

図の北は前稿で記した橘町で，その中に村松町が入りこんでおり，西の浜町川入堀際に，道を隔てて，久松町という小さな町があった。そして，これらの町の南一帯はすべて武家屋敷である。そのうちのＡの武家屋敷地が，明治になって村松町に加わり，Ｂ・Ｃが久松町となる。

ここで，まず江戸時代におけるこれらの町の起立についてみておきたい。実際，村松町にしても，この図のように橘町の一部に，いつ頃，また何故ここに割りこむようにできたのかという点は定かではない。１つの町誌は『文政町書上』により，村松町はもと神田にあり，寛文元年に本所緑

図1　文久期の村松町と久松町



町に移され，天和3年に本所一円が武家屋敷に上地されるにおよび，再度移転を命じられて，貞享元年に橋町のところに代地を与えられたとする。[2)] このように，「村松町」がすでに他の場所に起立していたとするいわば「町名他所先在説」は，江戸ではよくある例ではあるが，橋町に代地を与えられたのが貞享元年とする時期については問題がないわけではない。橋町の起立は天和3年だから，それは翌年ということになるが，『日本橋区史』の「参考畫帖」の「天和中之形」という図には，[3)] すでにAの武家屋敷との境の道に，すでに「村松町」の字が記されているし，『中央区沿革図集』だと，この界隈がまだ「松平越前守の屋敷」で，橋町が起立していない「延宝年中之形」図に，すでに「村松町」という町名が記されているからである。[4)] これは考えようによっては，橋町が先か，村松町が先かという問題にもなりかねない。また『新撰東京名所図会』では，「元禄6年温清軒の江戸絵図に，村松町は筋違御門内（御門の際にて連雀町の旧地の側）にありて肴店と討(ママ)せり。

2)　窪田吾郎『中央区消えた町，懐かしい地名』p.156
3)　東京市日本橋区役所編『日本橋区史，参考畫帖』p.207
4)　中央区立京橋図書館『中央区沿革図集，日本橋編』p.42

村松町は享保の図にも尚この所にあり。宝暦の江戸絵図に，筋違門の内にありて，当所にも村松丁とあるはいかが。されど村松町は筋違門より移転し来れるには非るか」と疑問を投ずる。[5] つまり「町名他所先在説」もまた定かでないものがあるといえよう。『中央区史』になると，これには全く触れることなく，その上，松平越前守屋敷をも飛びこえて，「寛永以後，西本願寺の末寺だったところで，明暦の寺を移転した後，漸次町屋になった」と橘町の起立を述べるにとどまる。[6]

一方，久松町の起立についても，必ずしも定かではない。『中央区史』では「久松町はもと村松町の内であったのを，天和3年に分けて一町とした」といい，また「御府内沿革図書によれば，松平越前守邸が町地なり，邸跡に四辻ができて橘町が起立したのと前後して，本多豊前守の邸跡が町屋となった」という。[7] このように久松町が村松町より分かれた町という見方はかなり多い。『江戸・町づくし稿』でも，久松町は村松町から天和年間に独立したが，「久マツ丁」の名が見出されるのは享保図であって，小さな町なので大絵図には記されなかったと記す。[8] 確かに，その名に「松」がついているのも，村松町からの分地の印象をもつが，久松町や若松町が村松町を母体とするというのには，やはり，いずれも名主が村松源六であったということにも帰因しているのかも知れない。もっとも『江戸町鑑集成』をみると，[9] 享保年間の万世町鑑では，名主は村松利右門で，以後のこの名主支配の町には富沢町も含まれていることから，名主名と町名との整合性・分地を一概には断じえないように思える。

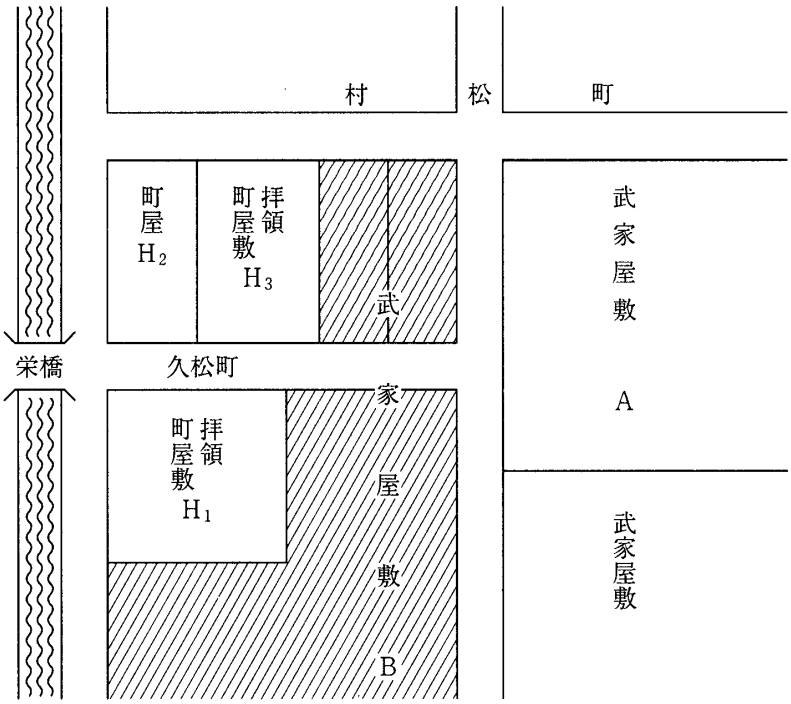
しかし，久松町が村松町より独立したとして，これが天和年間となると，前述した村松町起立が貞享元年という説も疑問になるし，また村松町がこれを分地したとすれば，そこまでの範囲が村松町であったという形跡がなければならないが不明である。結局は，『東京府志料』のように[10]「此地ハモト村松町ノ分地ナレトモ其年代詳ナラス」となるのかも知れない。もっとも，これは「分地」がはっきしないことだけで，久松町の町の形成経過は比較的にわかり易い。図2は図1の中での久松町のところを拡大した略図で，[11] H_1が最初の町屋であった。ここは延宝年間に，まだこの界隈一帯が武家屋敷であった頃，御破損手代屋敷が町屋になった箇所である。次で，天和3年に橘町が起立したのと前後して，本多豊前守の屋敷跡が町屋になってゆく。[12] 図のH_2，H_3のところである。

H_1は元禄9年に御材木蔵同心の拝領町屋敷となったところでもある。『諸向地面取調書』によると，この拝領町屋敷は886坪余で，材木手代の名儀で町人に貸与したとある。[13]『中央区沿革図集』に

---

5)　風俗画報『新撰東京名所図会』第27編　p.45
6)　中央区役所編『中央区史』（上）p.153
7)　前掲書及び江戸幕府普請方編『御府内場末位置其外沿革図書』
8)　岸井良衛『江戸・町づくし稿』p.224
9)　加藤貴編『江戸町鑑集成』第1巻「万世町鑑」
10)　東京都『東京府志料』p.248
11)　前掲『中央区沿革図集，日本橋編』p.111
12)　前掲『中央区史』（上）p.154
13)　内閣文庫所蔵史籍叢刊『諸向地面取調書』（三）p.946

図2　江戸時代の久松町略図



集録されている「寛保沽券図」でも，この材木手代として，江森縦助，金田源助，染谷次郎兵衛，樽沢七郎左衛門，宮通喜八郎，広野三右衛門が記されているが，[14] これらの人名を確めるすべはない。H_3のところも，元禄11年に拝領町屋敷になり，地主は松井庄之助と記されている。ここでは対象外だが，若松町も元禄７年に御用達町人などが町屋敷を拝領して起立している。これに対して，すでに述べたように起立の経緯は不詳なことが多い村松町には，こうした拝領町屋敷はそのごく一部にあったにすぎない。「寛保沽券図」では元文５年の落合十郎左衛門と御坊主衆の徳田長勝が正徳５年にそれぞれ拝領しているのみである。『諸向地面取調書』では牧世之助と青柳銀次郎という小普請組の侍が拝領しているが，全体として，これらの拝領町屋敷は12分の１程度にとどまっていたとみられよう。そこにも，村松町と久松町とは異なった町の姿があったといえる。

江戸時代におけるこれらの２つの町の商いについて，わずかに『江戸・町づくし稿』しか目下のところ，手がかりはないが，[15] これによると，妙に菓子屋が多い。村松町には，八けんせんべい村井千賀喜店，久松町には，金つばやき及び京菓子の花沢近江店，京都の嵯峨おこしの和泉屋求馬店などがあり，他方，村松町には，このほか，武家屋敷に対面しているだけに，武家を相手の商いが多く，脇差刀拵所いわつきや仁右衛門店，塗物問屋三河屋仁兵衛店，眼鏡師美濃屋吉右衛門店，紀州御用商人の小間物・塗物・煙草入などを扱う日野屋茂八店などがあった。これに対して，久松町に

14)　前掲『中央区沿革図集，日本橋編』p.109，p.111
15)　前掲『江戸・町づくし稿』pp.223-224

は，浜町川入堀河岸に接しているだけに，千鳥そばや十一屋，酒や満寿屋平兵衛店などがあったが，しかし，ここに古手問屋江口屋仁平治の店があったことは特記に値しよう。これは以前にも拙著で述べたが，[16] 江戸時代における古着の老舗の大店であったからである。

周知のように，古着の需要は江戸の人口増加や消費生活の発達とともに拡大し，その売買は盛況を極めていたが，問屋はいずれも浜町川入堀近くの町々，元浜町，高砂町，新大坂町，それに橘町にあった。江口屋は代々この橘町１丁目に営んでいた大店で，四代目の時に番頭だった仁平治が養子相続をし，その実家と合併して久松町に店を出すが，天保12年の頃の年間仕入高は１万２百両にも達していた。これからみて，久松町は，すでにどちらかというと，浜町川入堀の西側と同じ商業圏に属していたという点で，橘町１丁目と同じ特徴を小さいながらもっていたといえるのではなかろうか。

それでは，最後に，明治にこれらの町に加えられてくる武家屋敷地について，どんな特色を見出すことができるであろうか。表１－ａは図１のＡにある後に村松町となった武家屋敷であり，表１－ｂは図１のＢ・Ｃにある後の久松町となった武家屋敷である。そこには，わかった範囲での幕臣の姓名・職身分（俸禄）などを記載しておいた。そして，元禄と文久の２つの時期をかかげてあ

表１－ａ　明治期に村松町となった武家屋敷（図１のＡ）

	元禄期			文久元年		
	姓名	職身分	俸禄	姓名	職身分	俸禄
北側	岩手五左衛門	上方勘定衆	150俵	浜田三次郎	右筆→腰物方	400俵
	糸原勘兵衛	勘定奉行支配	350俵	村部善太衛門	寄合席	100俵
	窪田庄右衛門	大番	200俵	神尾安太郎	勘定方	150俵
	阿部彦四郎	大番	200俵	東條吉十郎	右筆衆	300俵
	由比長兵衛	小普請組	450石	石井敬之丞	徒組頭	170俵
				藤沢順三郎	?	
				内海多次郎	?	
南側	荻原十郎	勘定奉行	3700石	芝山猪三郎	小普請組頭	200俵
	木部藤次	?		多紀安元	奥医師	200俵
	山本源八郎	新御番	250俵			30人扶持
	鈴木庄左衛門	?		高木喜左衛門	小普請組	300俵
	石津九兵衛	腰物方	400俵	吉川幸七郎	布衣	100俵
				小笠原半十郎	甲斐代官	70俵
						5人扶持
				安藤典膳	小普請組	200俵
				星野一郎兵衛	金奉行	200俵
				内藤幸之助	?	

16）拙著『江戸・明治・大正日本橋界隈の問屋と街』pp.51-54

表１－ｂ　明治期に久松町となった武家屋敷（図１のＢ，Ｃ）

元禄期			文久元年		
姓名	職身分	俸禄	姓名	職身分	俸禄
南條勘兵衛	小姓組	600石	井上弥三郎	学問所教授	300石
能勢権右衛門	上方氏官衆	150俵	宮部□八郎	？	
富本八左衛門	小普請組	10人扶持	大岡勒負	大番格小普請組	300俵
小泉茂右衛門	上方代官衆	250俵	田名瀬助左衛門	鳥見	100俵
設楽勘右衛門	？				5人扶持
			竹内鍋五郎	講武所奉行組	48俵
					2人扶持
長坂七之助	関東勘定衆	200俵	長坂鍬五郎	左に同じ	
堀長門守	信濃須坂	1万53石	小林三十郎	大番小普請	250俵
			木村弥太夫	留守居同心	20俵
					2人扶持
			飯田庄蔵	講武所頭取	100俵
					500両
			野口藤三郎	勘定出役	70俵
					5人扶持
			牧野遠江守	信濃小諸	1万5千石
			諏訪左門	小普請組	700石
			斉藤辰吉	勘定評定所	150俵
			佐藤新九郎	講武所奉行支配	200俵
			村松民五郎	小普請	150俵
					3人扶持
			小笠原左衛門佐	越前	2万2777石
			吉野伊織	小普請組	200俵
			中野又兵衛	勘定組頭	200俵
				祖父河内守小姓頭取	
			水野吉太郎	本家相続	2000石

ａ，ｂ表共に職身分・俸禄は注17)の資料による。

る。

このａとｂとを元禄についてみると，両者にかなり特徴的相異がある。ａの村松町では役付のものが多く，特に3700石の勘定奉行荻原十郎以下，勘定方がめだち，全体として中層幕臣群の屋敷であったといえる。これは文久においても，俸禄水準がやや低まったものの，それほど差のない者の屋敷で，元禄期10家から細分化したとしても15家にとどまっている。これに対して，ｂの久松町では階層に著しい差がみられる。元禄期では小普請組の富本八左衛門がわずか10人扶持に対し，この地域の南部には堀長門守という信濃須坂の１万53石の大名屋敷があるなど，旗本・御家人クラスと

17)　熊井保『江戸幕臣人名辞典』，鈴木寿『御家人分限帳』，小川恭一編『江戸幕府旗本人名事典』，同編『寛政譜以降旗本家百科事典』，石井良助監修『文化武鑑』，前掲『諸向地面取調書』

大名とが混在する。こうした同一地域の中での武士の階層較差は，文久にも続き，下は木村弥太夫のような留守居同心20俵2人扶持や竹内鍋五郎，講武所奉行組48俵2人扶持のような御家人から，牧野遠江守，信濃小諸の大名1万5千石，小笠原左衛門佐，越前の大名2万2,777石に至るまで多様な幕臣の屋敷がみられると共に，その屋敷数も7家から19家に細分化されたのであった。

こうした武家屋敷も，明治に消失し，それぞれ村松町や久松町となるが，この武家屋敷当時の両地域の違いこそ，またこれら2つの町の史的特徴を形づくるものだったといえるのではあるまいか。

3．明治期の町の特徴

それでは，この2つの町は，明治になってどのように変ったであろうか。それぞれの武家屋敷地が江戸時代にすでに起立した町に加わり，村松町，久松町になったのは明治6年である。ここでは，それ以後の町の特徴を様々な視点から記してみたいと思う。

表2には，これらの町の坪数，人口，戸数の，明治11年と大正2年との対比をかかげておいた。

これをみると，村松町の方は，旧（江戸時代起立）の2,435坪に対して，その1.5倍の3,690坪が新たに加わって，計6,125坪の町になったが，他方，久松町の方は，旧では787坪程度の小さな町だったのが，新たに武家地9,328坪が加わって，1万坪を越える町が出現したことになる。日本橋の古い町でこんな大きな町は1つもない。しかし，人口は明治11年には，村松町が682人に対して，久松町は473人にすぎず，戸数も162戸に対し130戸という閑散とした町にしかすぎなかった。したがって，1戸当りの坪数も，村松町が37坪，久松町が77坪でまだ商業地としての様相をていするには至っていない。しかし，明治期を通して，町は発展し，人口も大正2年には，各々1,689人，2,457人となり，特に久松町では5.1倍，戸数もほぼ3倍に増加した。その結果，表のよう

表2　村松町・久松町の人口と戸数（明治11年，大正2年対比）

町名		坪数	人口			戸数		
			明治11年		大正2年	明治11年		大正2年
村松町	旧	2,435坪	男	337人	1,001人	計	162	228
	新	3,690	女	345	688	人口／戸数	4.2	7.4
	計	6,125	計	682	1,689	坪／戸数	37坪	26坪
久松町	旧	787	男	233	1,381	計	130	378
	新	9,328	女	240	1,076	人口／戸数	3.6	6.5
	計	10,115	計	473	2,457	坪／戸数	77坪	26坪

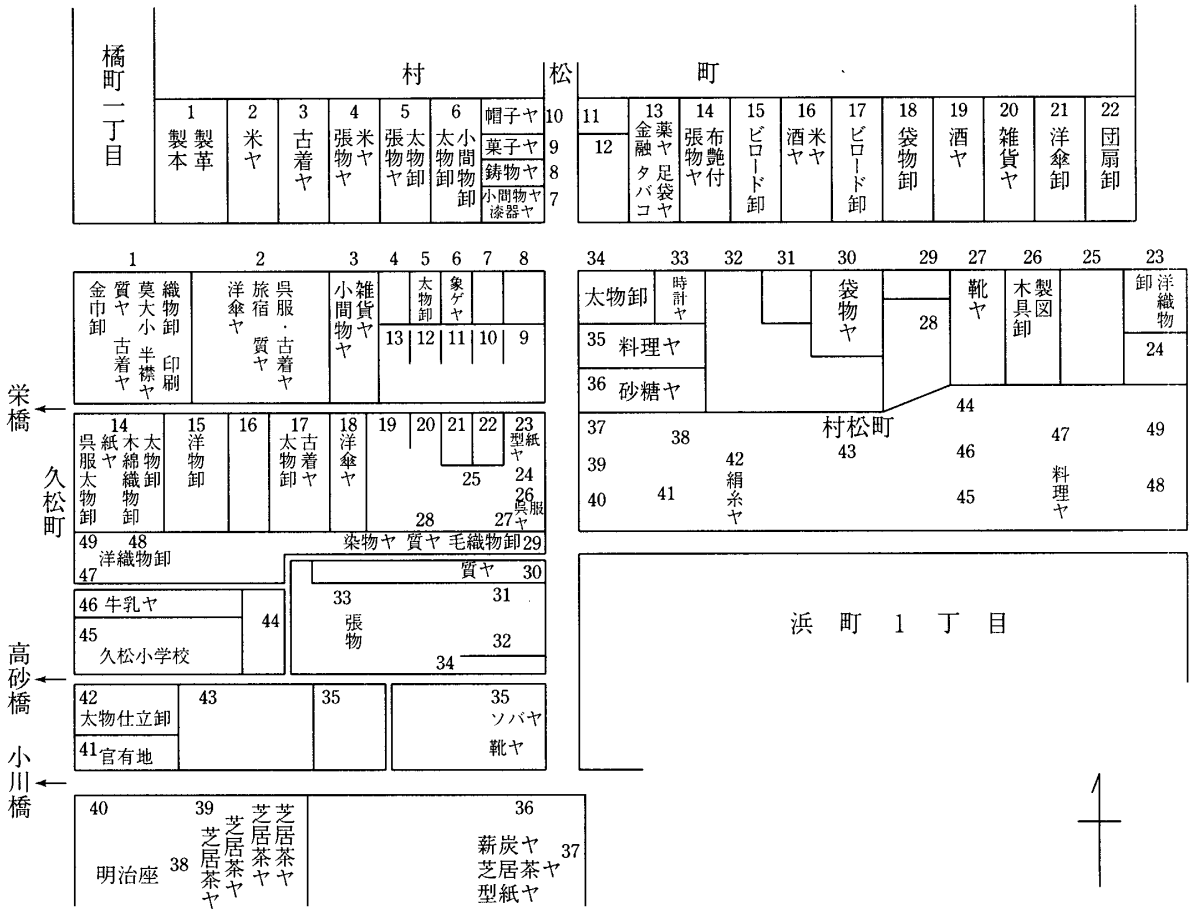
坪数は『日本橋区史』地籍台数より算出，人口，戸数は明治11年が『東京府志料』大正2年は『日本橋区史第1冊』。1戸当たり人口，坪数は筆者。

に，１戸当りの平均坪数も，２つの町ともに同じ26坪程度のものとなっている。ちなみに日本橋の先進商業地帯の各町のそれは28坪であった。[18)]

そこで，明治に急速に町屋となった村松町や久松町が，どんな街並みになったかをみてみようと思う。

図３は明治31年におけるこれらの町の商店分布図である。これは，街並みをヴィジュアルにきわだたせるために作ってみたもので，町の地番区画など正確なものではないが，そこに，どんな商店がどこに多くあったかをうかがい知ることができよう。村松町は，むしろ，屋敷ばかりのところが町に変っただけに，そこには住宅が多く，商店は主として旧村松町に集中し，その南の通に面して，米ヤ，酒ヤ，タバコヤ，小間物ヤ，雑貨ヤ，足袋ヤ，張物ヤ，傘ヤなど日用品の店が並ぶ。久松町も商店はやはりこの通りに面したところと，このもう一本南の通りに入ったあたりに多い。特

図３　村松町・久松町商店略図（明治31年）



（商店は『日本商工営業録』明治31年による）

18)　東京市日本橋区役所編『日本橋区史』第１冊 p.406

に，江戸時代から早く町になっていた１番地と14番地には，かなりの数の店がみられる。これは浜町川入堀の河岸に接し，しかも栄橋を渡ってゆくと問屋の町，富沢町に通じている故である。このことは，久松町が橘町１丁目と同様に，堀留界隈の織物問屋街化に大きく影響されて，同じ商業圏に包摂されてゆくことを意味していたといえよう。

表３は村松町と久松町の明治31年における織物問屋である。すでに拙著で度々述べてきたように，堀留界隈は明治30年前後から急速に織物問屋街化が進んでおり[19]，まさにこれと軌を一にした現象がここにもみられるのである。村松町に６店，特に久松町には13店も織物問屋がある。もっとも，それらの店の規模はさほど大きくはない。村松町の中川喜三郎店，中島斗作店，久松町の下村忠兵衛店，栗田庄太郎店が売上税４万円以上を示すだけで，他は小さい店が多いが，１つの町にこれだけの織物問屋の店が出現したことは，注目に値しよう。しかも，これが大正期に入ると，村松町では12店，久松町は23店にもなる。これは浜町川入堀以東の町々の中では群をぬくものであった。織物問屋の数の比較的多い橘町１丁目が14店，２丁目が９店であったからである[20]。また，この

表３　村松町・久松町織物問屋（明治31年）

町名	店主（屋号）	業種	売上税（円）
村松町	藤野嘉兵衛	呉服太物	23,760
	増田忠助	〃	20,240
	中川喜三郎（近江屋）	呉服木綿	64,800
	永見市蔵	洋織物	14,294
	中島斗作	〃	54,060
	伊藤勝次郎（駿河屋）	〃	25,381
久松町	下村忠兵衛	呉服太物	145,200
	山本嘉七（和泉屋）	〃	39,000
	永田幸吉（絹屋）	〃	33,650
	浦川己之助	〃	9,400
	藤村清助	〃	27,760
	宮田武兵衛	〃	16,760
	島崎富人出張店	呉服木綿	32,540
	遠藤平吉（小島屋）	〃	20,400
	内田定助（よしや）	金巾木綿	19,000
	中村少三郎（伊勢屋）	洋織物	21,000
	柴田半六	〃	13,550
	山郷豊次郎	〃	18,900
	栗田庄太郎（上野屋）	〃	58,200

「東京市日本橋区商工人名」（『明治期日本全国資産家地主資料集成１』）より作成。

19）注16)の拙著及び『日本橋街並み商業史』p.229
20）大正９年『東京・横浜問屋便覧』による

織物問屋に，洋織物，金巾などのような当時のいわゆる「舶来物」を扱う店がみられるのも，この時代を反映するものといえよう。今，表3をみると，村松町では6店中の半分が洋織物であり，久松町では13店中金巾・洋織物が5店であったが，大正9年には，村松町のそれは12店中10店，久松町では23店中10店がこの種の織物であったことにもよく示されているところであろう。[21)]

しかし，久松町と村松町という2つの町をみた場合，久松町の個性はやはり，この町に明治座があり，この周囲に芝居茶屋のあったことではなかったか。

周知のように，それは，明治5年に両国広小路の小屋が取払いになり，そこにあった「三人兄弟芝居」が，三座以外の芝居興行が東京府々令で正式に認められたのを機会に，久松町の浜町川入堀河岸に移り，喜昇座をつくったのに始まる。そして，明治12年にこれが大改築されて大劇場「久松座」となるが，それは，新富座，中村座，市村座に次ぐ劇場となっただけでなく，新富座より一層新しい意匠を加えた「模範劇場」とさえ評されたのであった。[22)] この座附きの俳優として多見蔵，翫雀，九蔵などが練出しで，日本橋から堀留，人形町通り，住吉町から，この久松座に乗りこみを行った華やかさは長く語りつがれてきたところでもある。[23)] しかし，翌年，橘町4丁目よりの出火で延焼し，明治17年に新築落成，「千歳座」となる。この開場興行では，六二見連，水魚連，東千睦連中などが総見するというほどであった。[24)] ところが，明治23年これが失火により再び焼失し，市川左団次が私財を投じ，平沼専蔵などの出資で，新築落成をみたのが明治座で，これは歌舞伎座と市村座とを折衷した洋風の大劇場であった。かくして，浜町川入堀に面し，かつて久松座ができた折，私費で架けた久松橋川筋に幟がはためき，まわりには芝居茶屋が並び，その風景は確かに久松町という町を華やかに色どるものであったといえるであろう。もっとも，この芝居茶屋は劇場との摩擦をくりかえしつつ，大正期に廃止されるに至る。

こうして，久松町を改めてみるとそれは多彩な町だったといえる。通りごとにつくられた4つのブロックから成りたっていたからである。前にかかげた図3のように，まず富沢町という織物問屋街に通ずる栄橋から東への通の北面のブロックがあり，商店の多い箇所，また高砂橋から東に入る道の北，角の45番地に久松小学校がある小住宅も多い大きなブロック，次に人形町繁華街に通ずる小川橋からの広い通りの北，久松警察署のある官有地が広くとってあるブロック，そして，久松橋のほとりにある明治座のあった36番地から40番地のブロックである。これに対して，村松町は通りに面した異った町風をもつ南北の2つだけのブロックから成り，周囲は橘町，若松町，薬研堀町，矢の倉町，浜町1丁目，それに久松町などによって固められたような町という点で，久松町が「外に開いた町」ならば，ここはどちらかというと「内向きの町」であったいえるのであるまいか。そ

---

21) 前掲資料より算出
22) 藤田洋『明治座評判記』p.10，木村錦花『明治座物語』p.11
23) 前掲『明治座物語』p.12
24) 秋庭太郎『東都明治演劇史』p.137

れは市電が小川橋から久松警察署の前を通って両国に至るようになったとき，この町風はますます加速されるに至ったといえる。

4．商業発展期の町の地主

それでは，明治期の商業発展期におけるこれら2つの町の地主はどのような者達であったろうか。

周知のように，これらの町の武家屋敷は明治になって激変する。明治6年には一斉に町屋になり，沽券図ができて，土地の売買がおこなわれるようになる。とはいえ，この町の大半は，明治初頭からの居住者が土地を所有していた。明治9年の地主名鑑によると，村松町も久松町も，町外地主比率が32%～36%にすぎなかったとみられる。しかし，明治末年になると，これは大きく変化し，久松町は59%，村松町にいたっては75.5%にまでになる。いいかえると，村松町は町内居住者がそこで土地を持っているものが，わずか4分の1程度にしかすぎなかった。

それを他の町々と比較してみると，商業地として明治30年代に織物問屋街化した田所町は44.8%，長谷川町37.5%，富沢町は42.3%であったし，村松町の北隣の橘町にあっては，すでに前稿で述べたように[25]，1丁目は14の地番のうち，たった1人だけが町外地主だったし，2丁目は45.4%，3丁目は47.6%，4丁目は30%であった。ということは，広い官有地を含む久松町はともかく，村松町がいかに町外地主が異常に多かったかがわかろう。こうした2つの町の地主状況をみたものが図4である。斜線でぬってあるところが町外者の所有地である。

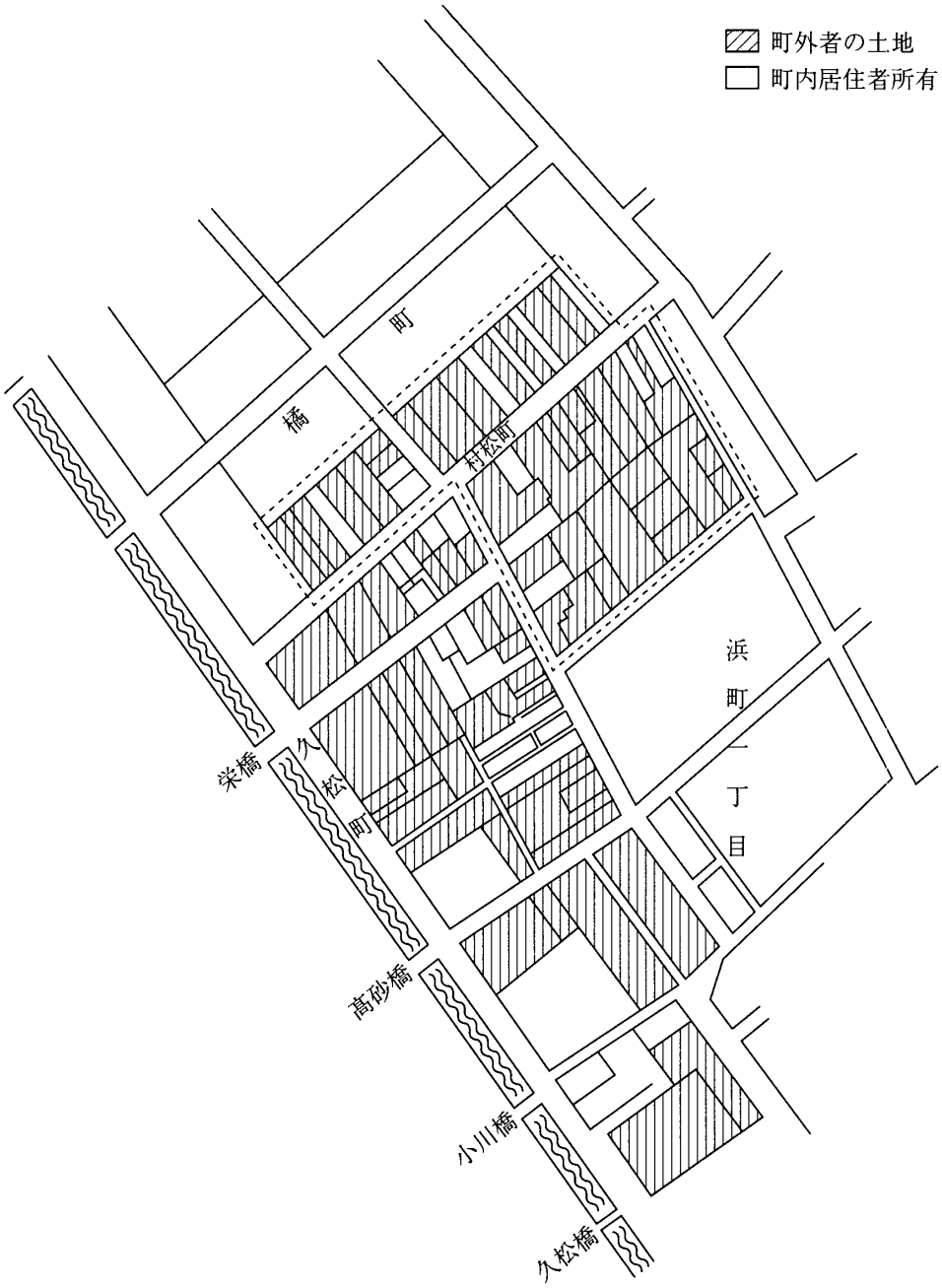
村松町が特にこのように，町外者土地所有が多く，町内で土地を持つ居住者が少ないのは，まず基本的には，武家屋敷地から漸く明治になり町になったという「町としての歴史」の浅さによるものであったのは確かである。またそれだけに，明治前半に，この安い武家屋敷を買い集めるという浮動的な不動産投資がなされたこともあろう。しかし，明治末年の状況をみると，20年代末からの新しい商業発展期における，この町への先行投資の姿をみるといったら過言であろうか。

表4は明治45年における村松町，久松町の町外地主リストである。資料は明治45年地籍台帳から町外地主のみを地番別に抽出し，地主の住所・職業を附記しておいた。この2つの町の町外地主は，長谷川町の木綿呉服問屋建石今のほかには重なっていない。それはこれらの町への関心の違いを示すものといえよう。

町外地主の職業で，この2つの町はかなり対照的である。村松町のそれは，荒物，漆器，織物，果物，銅鉄，小間物，船具，袋物，洋酒商など業種が広範囲にわたり，そこに一定の傾向を見出し

25）前掲拙稿「日本橋橘町商業史覚書」p.81

図4　村松町・久松町の町外土地所有地（明治45年）



得ない。もちろん，この中には，洋酒問屋で銀行の頭取中井新右門や横山町の小間物問屋の大店天野源七のような日本橋に1万坪以上の土地を持ついわゆる大地主もあるが，織物関係では久松町と共通の建石今店を除き，2店しかなく，特に10番地の地主，渋谷正吉店は毛織物という時代の花形商品を扱っていても，日本橋に土地はこの村松町しか持っておらず，また14番地の富沢町の稲村武次郎という呉服木綿問屋も，土地所有資産はわずかであった。

これに対して，久松町の町外土地所有者は織物商が8店，薬種商が6店というように，業種的に

表4－a　村松町町外地主　明治45年

地番	所有者名	住所 職業	地番	所有者名	住所 職業
1 〜 3	猪早鼎	深川 川崎銀行次長心得	22	浅井商会	通旅籠町 銅鉄問屋
5	中村喜四郎	橘町 荒物問屋	26 27	中谷福太郎	浅草 —
6	小林藤右衛門	通町 漆器商	28 〜 30	中井新右門	金吹町 中井銀行
9	渡辺よね	南茅場町 銀行	31 32	天野源七	横山町 小問物問屋
10	渋谷正吉	通塩町 毛織物商	34	喜多みさ	深川 材木商
11	戸田康保	矢之倉 旧松本藩主	35	小倉久兵衛	小網町 船具問屋
12	須田友吉	浪花町 文庫紙商	37 38	中井永一	金吹町 中井新右門弟
13	中村べん	小網町 荒物問屋	40	鈴木あく	神田 —
14	稲村武次郎	富沢町 呉服木綿問屋	41	佐藤伊右衛門	横山町 袋物問屋
16	西村小市	神田 果物問屋	42	福井伊三郎	浪花町 —
18	森津ユキ	通塩町 合羽卸商	43	安田銀行	小舟町 銀行
20	大谷チカ	浅草 料理業	44 〜 46	近藤利兵衛	本町 洋酒商
21	岩田林兵衛	本石町 煙管商	47 〜 49	建石今	長谷川町 木綿呉服問屋

所有者名・住所は「明治45年地籍台帳」，職業は筆者調べ。—は不明なもの。

まとまりを示している。織物商では，大伝馬町の伊勢の木綿問屋長谷川次郎兵衛から富沢町の稲源（稲村テイ）という老舗や，京都にある下村合名，弥生町の島田利右衛門，長谷川町の西村与兵衛店などいずれも大店であり，特に37番地の所有者，伊勢清呉服店・牧田清左衛門は市内有数の大地主である。[26] また薬種問屋も伊勢屋星野与兵衛は人造じゃ香の発売元で区内屈指の富商で，35番地と43番地を所有する堺屋高木与兵衛は高木清心丹本舗と知られた店で，日本橋区内でも10ヶ所も土地を持つ富商であった。このほかに，大鐘あぐりは室町で勝田屋という傘問屋を営み，当時50万円以上の資産を持つ富商として知られていたし，30番地の薬師寺久兵衛は本所の薪炭商だが，市内に約1万坪をも持つ大地主である。また31番地の平尾賛平は明治後半の成長産業である化粧品問屋である

26）　これらについては拙稿前掲書，及び『日本橋堀留東京織物問屋史考』

表４－ｂ　久松町町外地主　明治45年

地番	所有者名	住所 職業	地番	所有者名	住所 職業
1	太田とみ	深川 材木商	31	平尾賛平	横山町 化粧品問屋
2	大鐘あぐり	室町 傘商	32 33	市川覚亮	山形県 —
3	長谷川次郎兵衛	大伝馬町 木綿問屋	34	小林喜一郎	元大阪町 薬種商
6	藤井吉之助	本船町 酒味噌問屋	35	高木与兵衛	元大阪町 薬種問屋
9	稲村テイ	富沢町 呉服問屋	37	牧田清左衛門	堀江町 呉服太物問屋
10	小西新兵衛	本町 薬種問屋	38	浦国忠	深川 —
11	小野春吉	浜町 古美術商	38	堀越角次郎	通旅籠町 投資会社
14	下村合名	京都 木綿呉服問屋	42	長谷川次郎兵衛	大伝馬町 木綿問屋
14	島田利右衛門	弥生町 毛織物問屋	43	高木与兵衛	元大阪町 薬種問屋
15 〜 17	横田清兵衛	神田 日進銀行頭取	46 47	佐々木東洋	神田 医師
18 23 24	星野与兵衛	伊勢町 薬種問屋	48	西村与兵衛	長谷川町 太物問屋
26	服部吉兵衛	堀江町 薬種問屋	49	建石今	長谷川町 木綿呉服問屋
30	薬師寺久兵衛	本所 薪炭商			

が，更に38番地に堀越角次郎の名があるのは注目に値する。それはすでに拙著で度々述べたような木綿太物問屋の老舗で，当時は資産運営の会社となり，東京市内に７万４千坪の大土地所有者であったからである。

こうして，村松町と久松町とを比較すると，土地所有の面からも，かなりの相違を見出すことができる。それはこの２つの町が，江戸時代に起立した町屋を核として，各々，武家屋敷を併合して成り立った明治の新しい町という店では共通しても，それぞれ異った町の様相をもつに至ったことを示しているといえるのではあるまいか。